



あるあおむしのお話

ライトワーカーのための絵本

sample

透宇

sample

「さあ、がんばって行ってらっしゃい」

その声を合図にしたかのように、柔らかな葉っぱの上で一匹のおおむしが目覚めました。

名前はロルといいます。

ロルがあたりを見渡すと、同じような姿のおおむしやまだ卵のままの仲間がいます。

上を向くときれいな青空で、太陽は暖かい日差しを降り注いでいます。

そよそよと風が吹いていて、ロルはとっても気持ちがいいと思いました。

「おはよう」

突然、背後から声を掛けられました。

ロルが振り向くとそこには同じおおむしがいました。

「おはよう」

ロルも挨拶をしました。

「君、なんて名前？僕はカイっていうんだ」

「ロル」

「ロル、お腹空いてないかい？ごはんを探しに行かない？」

その誘いにロルは少し戸惑いながらも、ついて行くことにしました。

「友達ができてよかったね」

どこからか優しい声が聞こえました。

「ねえカイ、今何が言った？」

ロルはカイが話しかけてきたのかと思ったので、聞き返しました。

「いや、なにも言ってないよ？」

しかし、カイではないようです。

「じゃあ、なにか聞こえた？」

「うーん、鳥の声なら聞こえたよ」

ロルに聞こえたのは鳥の声ではない、はっきりとした言葉でした。

もう一度ロルはカイに確認してみます。

「カイは友達がどうか聞こえなかった？」

「いいや、聞いてないよ…どうかしたの？」

不思議がるカイにロルは首を横に振りました。

「…ううん、なんでもない」

ロルは声が聞こえたことを秘密にすることにしました。

ロルとカイがごはんを探している時でした。

「おい、おまえ…なんか変わった色だな!」

「本当に同じあおむしなのか?」

そういいながら 3 匹のあおむしが近づいてきました。

たしかにみんなが緑色な中、ロルはすこし青みがかった緑色です。

でも、ロルは確かにおなじあおむしです。

「同じだよ」

ロルはそう言いましたが、3 匹は聞きません。

「変だろ」

「普通じゃない」

などと言って悪口を止めようとはしないのです。ロルは悲しくなって涙が出そうでした。

「いいかげんにしろ、ロルは変じゃない!」

カイが 3 匹に怒りました。とても怒っています。

このままでは喧嘩をしてけがをしてしまう、そう思ったロルは言いました。

「…向こうへ行こう、カイ」

そしてロルとカイはその場を離れました。

「ロル。あいつらの言うことなんて、気にしないでいいよ」

そうカイはロルを慰めてくれました。ロルはカイがいてくれてよかったと思いました。

「ありがとう、カイ」

「どういたしまして」

カイは返事をすると、ロルをじっと見ながら

「僕はロルの色、とってもきれいな色だと思うな」

と言いました。

「…あ、ありがとう。」

ロルはなんだか恥ずかしくて、うつむきながらお礼を言いました。

それから 2 匹はいつも一緒でした。

ご飯を食べたり、遊んだり、危ない目を乗り越えたり。

いろんな時間を分かち合うことで、2匹はとっても仲良くなっていました。

ある時 ロルは自分にしか聞こえない声やロルが誰かを見たときに、周りに色が視えることをカイに打ち明けました。

「この周りについて色のことを"オーラ"というんだって…声がそう教えてくれたの」

ロルはカイがなんて返事をするか、怖くて仕方ありませんでした。

もしもカイに気持ち悪いとか言われたらと思うと、そのまま死んでしまいそうです。

けれど、このままずっと声のことを秘密にしておくことはできそうになかったので

伝えることにしたのです。それまでロルの話を黙って聞いていたカイは口をひらくと

「へー、みんな違う色なんだよね?じゃあ僕は何色?」

わくわくした様子で、ロルに自分のオーラが何色なのか尋ねてきました。

「…カイ、わたしのこと変だって言わないの?」

ロルは思わずカイに聞いてしまいました。

「ロルのことを変だなんて思わないよ」

「本当に?」

「本当、僕のことを疑うのかい?」

「うん、ごめん」

ロルはカイが自分の言うことを信じてくれたように、カイの言葉を信じることにしました。

「それで、僕は何色なの?」

再び、カイが尋ねます。

「青色。あの矢車草みたいな青色だよ」

ロルは近くに咲いている矢車草の花を見つめながら答えました。

「じゃあ、こないだの意地悪な3匹は?」

「赤と橙と黄色、でもみんな黒っぽくなった」

「そうなんだ」

カイは頷きました。

「色によって意味があるみたいなんだけど、今はよくわからないんだ」

ロルがそう付け加えるとカイは

「じゃあさ、ロル。いつかわかったら教えてくれないかい?」

と言いました。

「うん、そうだね」

ロルはざっと秘密にしていたことを、カイに話すことが出来てとても清々しい気分でした。



そしてまたある時。

2匹はいつものようにごはんになる葉っぱを探していたら、またあの意地悪なあおむしに出会いました。

「あいかわらず、変な色だな!おいカイ、そんな奴というとお前まで青くなっちゃうぞ」

またしても、そのあおむしはロールに対しての悪口を言い始めました。

カイはそれに反論しました。

「僕はこの色が大好きだよ。ロールの色は神様からプレゼントされた特別な色だ。」

ロールはそれを聞き、嬉しくて泣きだしそうでした。

そこに、ちょっと離れたところから声がかかりました。

「おーい、そこの子たちー」

あたりを見回すと、他のあおむしたちが呼んでいます。

「ここのキャベツ、美味しいよ!君たちも食べにきなよ」

彼らはとっても美味しそうキャベツの葉っぱの上にはいました。

「わあ、本当だね」

ロールとカイは教えてくれた仲間の方に行こうとしました。

けれど途中、ロールは何か嫌な予感感じてその場で止りました。

「どうしたの、ロール?行かないの?」

カイが尋ねますが、ロール自身にも理由は説明できません。

柔らかくて甘いキャベツはロールも大好きです。

でも、どうしてもこの先に進んではいけない気がするのです。

その時、いつもの“声”が聞こえてきました。

「進んではいけません。ここでしばらく様子を見ててください」

それを聞いてロールはカイに言いました。

「ごめんカイ…なんでかわからないけど、ここでちょっと待ってしよう?」

カイは頷いて、ロールとそこに留まりました。

その横を意地悪なあおむしがズンズン進んでいきます。

「あんなに美味しそうキャベツを食べに行かないなんて、どうかしてるぜ」

「頭おかしいんじゃないの?」

そういって3匹はみんなの方へ向かいました。

ロールだって、キャベツの葉っぱは食べたいです。

「…やっぱり、わたしがおかしいのかな?」

ロールがそう思って仲間たちを見ると、そこに人間が現れました。

人間は手にスプレーを持っていて、それで何かをキャベツにかけています。

「キャー!」

悲鳴が上がりました。

キャベツを食べていた仲間たちが苦しみ出したのです。

人間が手にしていたスプレーの中身は殺虫剤で、それによってあの意地悪だったあおむしも

他の仲間たちも皆死んでしまいました。

ロールは恐ろしくてたまりませんでした。

「もし、そのまま行っていたら…僕たちも同じ目に遭っていた…」

カイは震えているロールを宥めてくれました。

「命の恩人だね。ロール、ありがとう」

「…とんでもない、無事でいられてよかった」

ロールは心の中で“声”に感謝しました。

でも、仲間が死んでしまったことはとても悲しく思いました。

それからも、ロールとカイはとても仲良しでした。

「ずっと、こうしてカイといたいな」

ロールはそう願っていました。

とある夜、ロールは夢を見ました。

すごい風が吹いて、雨が降っています。どうやら台風のようなです。

その風でカイが飛ばされてしまいました。

「カイ!」

ロールは叫びましたが、でももうカイの姿は見当たりません。

「カイとの別れを準備しておくように!」

そう声がしました。

「な…に?…もう一回、言って?」

あまりにショックな出来事に“声”が何を言っているのかわからなかったの

ロールはもう一度言ってくれるように頼みました。

「カイとの別れを準備しておくように!」

再び“声”はそう告げます。

「カイと離れる?そんな、なんで?…いやだ」

ロールは首を横に振りました。

「起きることには、意味があります。辛いと感じることには特に大きな意味が」

声は優しくロールに語りかけます。

でもロールにはとても耐えられることはありません。

「いや…どうしたらいいの?離れたくないよ」

声に向かってどうしたらいいか聞きました。

「起きることを変えることは難しいのです。

だから皆、心の準備をしておくためにこうして眠っている間、わたしたちと先に起きることを打ち合わせしているのです。

多くの人は覚えていないですけれども…あなたには夢見の力があります。

そういった力の持ち主は、はっきりと見ることができるのです」

その声を聞き終わると同時に、ロールは目を覚ました。

空は晴れていて、隣にはカイが眠っています。

ロールはそれを見て安心すると大きく息を吐きました。

「…夢、嫌な…夢だった」

そう、すべては悪い夢だ。

ロールは自分に言い聞かせました。

それからしばらくした時のことです。

空は曇りというのに暗く、雨は激しく降り注いでいます。

そして段々と嵐が出てきました。

「カイ、しっかりと掴まっている?大丈夫?」

ロールは不安でたまりません。

前を見た夢の通りにカイがいなくなってしまうと考えたと考えると、怖くてしょうがありませんでした。

「大丈夫だよ。ロールこそ掴まっているかい?」

カイは笑顔で答えます。

2人が掴まっている木はしっかりとした大木でここで嵐が過ぎるまで過ごそうと決めました。

どのくらいそうして過ごしたのか 雨がその勢いを弱めた時にカイがロールを呼びました。

「そういえば、ロールは…」

続く言葉は聞き取れませんでした。

一陣の強い風がカイを攫って行ってしまったのです。

「…カイ?…カイー!!!」

ロールは悲鳴のような呼び声をあげました。

「嘘…嘘だ、やだ、どこに?…カイ!」

降りしきる雨の中、ロールはカイを探しましたがどこにもその姿はありません。

そして“声”のことを思い出しました。

「おえ!カイがどこにいるか知ってる?教えて?」

ロールは“声”に向かって話しかけました。

「お願い…こんなのいやだ…カイ…どうして?」

「あなたが辛いのは、わかっているつもりです。でも必要な出来事なのです」

そう声が返ってきました。

「いらない!そんな勝手に決めないで!…カイを返して」

「今の状況では理解できないかもしれませんが、あなたの成長の為に…」

「そんなのどうでもいい!知っているなら教えて…お願い…」

ロールは“声”を走り、怒りました。しかし返ってきた返事はロールを落胆させるものでした。

「今は我慢してください」

ロールは怒りに満ちた声で言いました。

「もういい、二度と“声”なんか聞かない!」

それから、ロールはただ必死にカイを探して回りました。

やがて疲れ果てて、眠ってしまいました。

来る日も来る日も、ロールはカイを探し続けました。

怪我をしていないか?

お腹を空かせていないか?

危ない目にあっていないか? ロールは心配でたまりませんでした。

でも、カイは見つかりません。

それでもカイが無事なら、自分のことを探してくれているはずだ。

そう思って頑張り続けました。

ためしよみ

は

ここまでです